

Title	日本吉利支丹宗門史(第一回)
Sub Title	
Author	吉田, 小五郎(Yoshida, Kogoro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.1 (1931. 3) ,p.97- 130
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310300-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本吉利支丹宗門史 (第一回)

はしがき——私は、大膽にも二三年前より、レオン・パジェスが日本吉利支丹宗門史 (Léon Pages: Histoire de la Religion Chrétienne au Japon. Paris, 1869) の翻譯に従つてゐる。此原本が、日本の西教史に思ひを寄せる人々に最も多く引用せられ利用される名著の一つであるに拘らず、今日まで一の翻譯が現はれないのは、一種の不思議とも思へる。自分がその任に非る事を良く知りつゝ、敢て之が翻譯を志した所以である。尙編輯者に乞ふて特に本誌に連載せんとするのは、大方諸賢の御閲讀を得て、多かるべき誤謬の訂正を願ひ、且つ自分が不明の點に對して御示教を賜はりたいが爲である。(譯者)

第一編 内府様の時代 (一五九八—一六一四)

第一章 一五九八—一五九九年 (慶長三—四年) (註一)

攝政官の設置——朝鮮の役の結了——治部少・淺野彈正兩奉行間の軋轢——治部少・家康間の不和愈々險惡なる——家康勝を制して天下の旗頭となる——宗教に有利なる事情——司教、朝鮮より歸還の指揮を命ぜられたる皇帝の役官二人を訪問す。彼等の好意——神父オルガンチノ、京都及び大

日本吉利支丹宗門史 (吉田)

阪の傳道所を再興す——フランシスコ會の神父ゼローム・デ・イエズス、家康より謁見を差許さる。家康、エスパニヤとの通商を希望す——司教、制度及び學院を擁して長崎より天草に退去す——志岐に設置された新しい駐在所——平戸に於ける迫害——ドーナ・マンシヤの壯舉——六百人のキリシタンの亡命——宗教の進展——山口に於ける新しい駐在所——太閤様、新八幡即ち新しき軍神として祀られたる事——八代に於ける十字架の出現——アントニオ・ロペス、フルビオ・グレゴリオ、ジル・デ・ラ・マッタ三神父の死。

一五九八年 (慶長三年)。太閤様 (Taicosama) は、臨終に及んで、六歳の世子秀頼 (Hideyori) に天下を譲らんとするに當り、人力を以てなし得る凡ゆる策を廻し、以て其安全を計つた。彼の面前、帝國の諸侯縁戚の諸大名が爲せる嚴肅なる宣誓に依り、遂に互の間に慎重なる考慮を経て組織せる、階級制の攝政官 (La regence) (五大老を指す) を設置することに決

(九七)

九七

教師等の偉大なる友、藤四郎殿(O Tochirono)、長

崎奉行にして、一國の領主なる寺澤殿(O Tarazado)、

廣高、肥前唐津の城主、文祿元年より、慶長七年まで長崎奉行の職にあり、淺野彈正の方には、

その一味として、肥後半ヶ國の領主にしてアウガ

スチンの身にとつて不倶戴天の敵たる主計殿(O Yedono)、

加藤(Yedono)、いづれも豊前の領主なる甲斐守(O Cami)、

黒(Cami)、田甲斐(O Ichinoami)、及びイチノカミ(O Ichinoami)、並に

肥前の領主鍋島(O Nabechima)、鍋島直茂(Nabechima)、等が左袒した。

一五九九年(O Genna)、之等諸侯は何れも、間もな

く政廳(Gura)に赴いて攝政官に對して、各自不滿の情を

披歴した。攝政官等の決議は、治部少に有利であ

つた。併し、反對黨は譲らず、新に陰謀を廻らし

た。

此の如き動搖の最中、他にまた由々しき軋轢を

生じ、之が全國を火中に投ずるに至つた。それは、

近時勢力を加へたる治部少と、攝政官の筆頭にし

て強力なる家康との間に、相當の理由を以て起つ

た。太閤様の世子に對し律義にして家康の野望を

看破せる治部少は、恐れる色もなく家康が天下を

僭奪して、主權を掌中に收めんとしてゐるのを責

めた。かくて彼は、日本の慣例に倣つて同志と共に

武器をとり、何れも同じ苦情を認めたアルテイクル條文(O 家

罪狀十三ヶ條を記し、奉行の)を作り、密かに家康に送つ

た。家康は、巧言を以て之に答へ、同時に三萬餘

の兵を國許より呼び寄せた。當時、太閤様の遺命

により、或は京都に隣接せる伏見(Fouchimi)に、

或は大阪(Osaka) (註二)に止まり、以て幼君の安

泰を計つてゐた日本全國の諸侯も、或者は家康方

に味方し、又或者は治部少その他一味の奉行に加

擔した。數週の間に、士卒の馳せ參ずる者夥しく、

かくて二箇所に凡そ二十萬の兵が集つた。併し、

かゝる危機に際會して、尙且つ諸侯の嚴命と、其

士卒の間に行きわたつてゐた訓練との爲に、數箇

月間毎日顔をつき合してゐながら、誰一人太刀を

抜く者がなかつた。實にふとした行き違ひから、

血の川を生じ、日本全國擧げて戰爭に參與するに

至るとは誰にも氣がついてゐたのであつた。

併しこの武裝したまゝの休戦は、家康をして陰

謀によつて敵方の一部の勢を挫くことを得させ

た。而して彼は、我が意を遂行する力ありとの自信あるところより、治部少に通牒を發して、自ら平和恢復の犠牲となり、切腹せんことをすゝめた。治部少は抵抗の結果を何等意に介せず、其通牒を無視した。然るに又新に事件が起つて、この領主の禍を一層甚しくするに至つた。家康は夜陰に乗じ、奸計を以て大阪城に侵入し、秀頼その人と同じ調子に主人氣取に振舞つた。治部少は六千の兵よりなる護衛があつたにかゝはらず、その城にかこまれてゐる隙をうかゞひ、辛うじて、家康の一味の攝政官の根據地たる伏見に引き上げた。アウガスチンは、治部少の後を追つて伏見に赴いた。

間もなく家康は伏見にのり出して、敵をして無理にも己が意のままに従はせやうとした。併し、同僚の攝政等が調停した爲に、家康は治部少に危害を加へることを承認したが、但し職を辭して近江の自領(○佐和山城)に引退するといふ條件附であつた。アウガスチンは、なほもこの友と進退を共にせんことを望んだのであつたが、友はそれを辭退

した。かうした殊勝な心掛故に、家康はこの提督アミラルに對し激するに由なく、寧ろこの偉人に對して敬意を催した。

治部少が一味の奉行は、なほ其職にはあつたといふものゝ、その頃よりは單に權利の形骸を保つてゐるに過ぎなかつた。彼等は黙々として鐵の軛ジュウクを受けしたが、夫といふも、彼等何れも己が頭を反らす術を知らぬがためであつた。何れも心底深く潜奪者に對して深刻な怨を抱いてゐた。潜奪者の命により、諸侯は悉くその部隊を解散し、各々郷國に歸つた。かくて家康は幼君の絶對の保護者となつたが、その間、血を流すといふ事もなく、一に政策によつたので、實際大老といふ稱號にかくれ齡七才の幼君の名義をかりて、明らかに天下の旗頭イイトとなつた。

兎角する中に、情勢は、宗教に對し寧ろ好都合になつて來たやうに見えた。

デ・セルケラ師(Mgr. de Cerqueira)は、神父パドレワリニヤーニ(P. Vaignan)と共に到着以來(一五九八年八月五日陰曆慶長三年七月四日)秘かに傳道してゐたが、別

に故障も起らなかつた(註三)。神父ワリニヤリーニは、二人の奉行が、軍隊の引上げの斡旋をする爲に遣はされて來た時、その奉行たる諸侯に手紙を送つたことがあつた。その奉行の一人淺野彈正は、彼が永年の馴染であつたが、一國の領主で長崎奉行の職にあつた志摩殿(○Chimadono前)との關係も亦同じであつた。神父は、かうした人々に、自分等は前年と同じく職責を帯びて同僚を慰問する爲に日本に渡來したものであるとの事を知らせた。三人の領主は、鄭重に之に答へた。彼等は何れも神父の訪問を受け、彼等又神父を訪問した。會談中たま／＼、彼等は基督の教を讃え、次いで太閤様が謬見を抱いてゐたといふことを言明した。同時に彼等は、神父に自重せられんことを勧め、時が経てば、漸時自由になり行くであらうといふ希望を與へた。

神父オルガンチノ(P. Organin)は、其頃耶蘇會の神弟二三名を伴つて京都に上つた。いづれも二年前に破壊せられた京都及び大阪の傳道所は、今や再興せられ、方々に散つてゐた兒童は再び寄せ

集められた。

又一方、家康は、政治的見地よりし、異國通商をかり得んがため、決して無愛想ではなかつた。政策や百般の取締を改めるとか、太閤様の遺命を正式に蹂躪したことが露はれないやうに(彼の懸念は、壓制的クレーダを前にして止まなかつた)。彼は正式に認可を與へた譯ではないが、事宗教に關すると、故意に、目を閉ぢた。従つて都(○京)附近のキリシタンは、自由の身となつたもの、如くに考へて、或は會堂を復興し、或は公然禮拜を行つた。

何れもフランシスコ會の宣教師にして以前日本傳道に従つた事のあるゼローム・デ・イエズス(P. Jérôme de Jésus)マルイス・ゴメス(Louis Gomez)の兩神父は、既に一五九八年五月(○慶長三)年四月、マニラから派遣されて居た(註四)。神父ゴメスは、直に見つかつて再び牢につながれてゐた。神父ゼローム・デ・イエズスは京都から程遠からぬイゼ(○The伊)の信者の家に匿れてゐた。然るに彼も亦一五九八年十二月七日(○慶長三年十一月十一日)、捕まつて家康の面前に

引き出された。家康は彼を優遇し、恐怖の念を總て捨去るやうに勸告し、且つ自由に行動を取りその會の法服を着けることを許した。同時に、家康は希望を述べていふに、年々エスバニヤのキリスト教徒が關東の諸港を訪れて通商をなし、銀山採掘の作業を自家の家來に教へてくれるやうにと言つた。神父ゼロームは、之に就いてマニラに書を送り、己れは關東に赴いて、そこに居住することゝし、それにつけても人事の激變と攝理の道をほめ讃へた(註五)。家康の最初の使者なる堺(Sakai)の一富商は、主君が望んでゐた程の成功はなし得なかつた。當時フィリピン政府は、カムボヂヤ王に船舶や兵隊をかして以て援助し、カムボヂヤの領國を奪つたシャムにあたり、かくてシャムは再び奪ひ返された。併し喜望は與へられた。家康はフィリピン群島を荒しまはつた日本の海賊がエスバニヤ人に不安を與へないとも限らないといふことを案じて、この海賊を檢舉し、二百人餘を死刑に處した。

其間に、長崎に於いて、宗教問題は捨て、あか

れぬ難關に當面した。治部少と淺野彈正との間が急に不和となり、殊に長崎の新奉行寺澤殿の惡意から、セルケラ師は、決心して神父の大部分を引きつれて、天草島即ちドン・アウガスチンの領地に退去することに決した。司教は齡既に五十路を越え、病弱も甚しい身であり乍ら、熱心に言語の研究に従ひ、退去した爲に出來た餘暇は、この言語の研究と學院セミナリヨの監督とに宛てる事にした。一五九九年三月(○慶長四年二月頃)、彼は天草を指して出發したのであつたが、ヴァレンチノ・カルヴァリヨ (P. Valentin Carvalho) マシヤン・ポメリエ (Jean Pomey) との兩神父と他に十四名の耶蘇會員が同伴した。三十人の生徒セミナリストも亦彼等と同道した。之等の若者達は、日本の言葉をも以て書かれた「ドチリナ・キリシタンの略」(L'Abbrégé de la doctrine Chrétienne) を徹底的に研究せねばならなかつた。やがて、天草は何分にも僻遠の地に在つて、こゝから耶蘇會全般にわたる用務を指圖することの困難と更に又著しく平穩になつて來たために、之もやはりアウガスチンの領地なる志岐に駐在所を建てた

が、こゝは有馬、大村及び長崎からは極く近いところにあつた。神父ワリニヤーニは、八月頃同地に赴いて司教と再會した。

その間に長崎にては、苛酷な迫害が行はれてゐた。寺澤殿は京都に上つた折、神父オルガンチノが家康やその他の攝政官との間が、如何にも親密なのを見て、自分が往年の苛酷を訴へられて奉行の職を失ふことを懸念してゐた。彼は、神父オルガンチノに是非長崎に歸らんことを乞ふた。併し、師の拒絶に遭ひ、代官に命を發して、宣教師等を迫害し、キリシタンが會堂に行くことを妨げさせた。この命令は、聖週の頃到達した。かくて二人の信者が、デシブリナを受けたといふ廉を以て、死を以て威嚇された。宛もその頃、神父ワリニヤーニは、寺澤と親しいドン・アウガスチンに宛てた書翰をもたせて、神父ジャン・ロドリゲス(Jean Rodriguez)を京都に遣はした。家康は神父ロドリゲスを優遇し、なほアウガスチンの斡旋は奉行の意向を一變せしめ、奉行は直に反對の命令を發した。家康は更に神父ロドリゲスに、今後は、

宗教のことに就ては全く安全と心得るやうにいひ含め、將來に對する實に貴重な保證を與へた。

併し、諸侯の中で或特殊な州では、信教の自由は屢々かゝつて、その人物の壓制的意向如何にあつた。かくて平戸(Hirado)に於ては、頗る激烈な迫害が起つた。この島の領主道可(D. 松浦隆信、道可と號す、慶長四年閏三月七十一才にて歿す)は近頃歿した。彼は謹直にして初は宗教に同情を寄せて居たのであつたが、その後は狂人ぢみた異教徒たる息子の法印(F. 松浦鎮信、部卿法印に叙せらる)が嗣いだのであつた。彼は父の存命中既に、領内を治めてゐたが、當時、惡行の決して自由でないことを自ら感じて居た。法印は取敢へず息子(久松浦)に命令を下し、偶像教の儀式によつて道可の靈を祀らしめた。同時に彼は、もと大村のドン・バルテルミイ(D. Barthelmi d'Omoura、大村純忠靈名バルテルミイ)の女にして夫人なるマンシャ(Mancia)に書を寄せて棄教を迫り、之を拒むに於ては、離婚する旨申しやつた。別扱の重臣も皆同じく家來や主家の役人を棄教させなければならなかつた。之等のキリシタンの中には、ドン・ゼローム(D. Jérôme)その子

ドン・トマス(D. Thomas)、從弟にして貴族の花たるドン・バルタザール(D. Balthasar)があつた。遂に、その他平戸のキリシタンは、悉く相次いでイエズス・キリストを見捨てるの已むなきに至つた。

殊勝なのは、ドーナ・マンシャ(○大村純(忠の夫人))であつた。彼女は躊躇なく、既に彼と別れ三人の幼兒(彼女は秘かに洗禮を受けさせてあつた)を残して出て行く覺悟をしてゐる旨を夫君に宣べ、家兄大村の領主に使を以つて、迎へに來てくれるやうに頼んだ。併し、天主は、犠牲の命令の償をし給ひ、夫が自分から折れて出で、その信仰を重んずることを約束して止まることを願ふに至らしめ給うた。

さて他の信者に就いていふならば、彼等は司教に相談してその本分を指示して貰つた。その由來仲々古く且つ著者なるこのキリシタンは、イエズス・キリストのためには、異口同音に一切を犠牲にし、郷里や世俗の財産を打ち捨て、長崎に亡命せんと決心した。(註六)肉體の苦しみを嘗めた者もあつたが、誰一人天主を見棄てる者は無かつた。

ドン・ゼローム並に主なる諸侯は、その家族や六

百人餘のキリシタンをひきつれて夜中に出發し、長崎に向つた。この自ら進んで爲した亡命は、異教徒をいたく驚かし、帝國の全キリシタンにとつては實に立派な手本であつた。

とかくする間に、之等の亡命者達は、二重の危険に遭遇した。さて太閤様の掟によれば、如何なる家來從僕と雖も、己が領主の許可なくして、他の領主に渡り仕へることを禁じてあつた。元の領主は、脱走した家來はごこで遭つても遭つたところで殺すことが出來、相手の領主は義務としてこれを許さなければならなかつた。亡命者を保護する可能性のあるキリシタン大名は、悉く京都に在り、又寺澤殿は法印の親戚にして味方で彼を拒絶すべき何もものも持つてゐなかつた。他の危険は、その元をたゞせば宣教師の貧窮にあり、宣教師はかくも夥しい賓客を支持する米鹽の資を欠いてゐた。従つてこの接待の故に身にふりかゝる危険はいふまでもない事であつた。

宣教師等の慈悲は、あらゆるものを救濟した。彼等は京都に手紙をやり、又神父オルガンチノは

ドン・アウガスチンに非常な援助を得て、キリシタンのために立派に辯護の勞をとつた。長崎にては、移住者は町から四半リユウ離れたところにある治外法權なる舊時の學林内コレジヨと、大村の領主の領内にかくまはれた。宣教師等のいたく義侠に富みたると、キリシタンの異常なる熱心とは、不思議にも異教徒に感化を及ぼした、ところその異教徒は自分等はさうした精神をもち、かくの如き徳を行ふには凡そかけはなれた人間であることを聲高らかに告白してゐたのであつた。大村のドン・サンセス(D. Sanche d'Omoura)は、なほ又彼が他の領地内に入つて來た亡命者のために非常な犠牲を拂ひ、之を二年近く支持した。

法印(○松浦鎮信)は政廳から歸り、この奇怪な移住のことを知つた。併し、心の中は之を押し匿しておく可きだと考へた。然るに、神の許しにより、第二の事件が起り、之がため彼は愈々立腹し、その政策を總て變更した。今回は彼の家中の者二百人が亡命した。法印は領内の人々が全くなくなることを懸念し、命令を發して誰にも迫害を加へぬや

うに命じた。宣教師等も亦、最早迫害を受ける憂はないから各々自分の居所から離れぬやう信者に言つてやつた。

當時、日本國中、宗教は目覺しい勢でひろがつて行つた。數多の宣教師等は秘かに元の駐在所に歸つてゐた。有馬や大村には教會堂が再興せられ、諸方に新しいキリスト教の團體が出來た。一五九九年の二月より十月まで(○慶長四年三月か、八月までに當る)の八ヶ月間に、約四萬人の未信者が洗禮を受けた。ドン・アウガスチンの領分肥後には、更に多數の信者が居たが、之はとりわけ大矢野(Oyano)にゐた神父ジャン・バプチスト・ポルロ (Jean-Baptiste Porro) の力によるのであつた。彼は充分問答書を教へる事が出來なかつたので、同志を澤山糾合して來て、その助けをかりて三萬人以上の人々に洗禮を授けた。アウガスチンの家來で名をジャック・サクエモン(○Jacques Sacouimon)とシム一侍は八代の奉行(假字、ジャック作右衛門カテキスト)であつたが、自ら同市の問答師となつた。ドン・アウガスチンが所領の首府、宇土(Oito)の町には洗禮を受けたる者六千人あり、又宇土から豊後の方角

へ十リユウの所にある城下ヤムバ(O Geamba 恐らく後部と同一ならんか、宇土よりの里數もよく合致す矢部氏の城下)には二千五百人の受洗者があつた。物故せるドーナ・ルシヤ(D. Luce)の夫たりし有馬の領主(晴信)は、名門の出なる異教徒の婦人と再婚したが、この婦人も亦キリシタン宗門を奉じた。彼は、博多に於て自ら傳道にたづさはり、その結果千五百人の異教徒が改宗するに至つた。

神父等は左記の如きシモ下九ヶ國(九州)の諸大名を歴訪して敬意を表した。薩摩・日向・大隅二ヶ國半の領主なる薩摩の大名(義弘)、肥前半ヶ國の領主鍋島(直茂)、豊前大部分の主たる甲斐守(斐守長政)筑後四半分を領有せるトシロンドノ(ヒデナリ)と名のつた(〇こゝでは藤七郎秀就に非ず藤四郎秀包の誤)一五八五年(〇天正十三年)の大使の一人イルマン神弟マンシヨ伊東(伊東祐益マンシヨ)の叔父にして日向三分の一領有せる伊東殿(伊東義益)諫早殿(〇Isafador)並に豊後の諸領主等が夫であつた。何れも皆宣教師等に對し懇懃の態度に出で、同時に領内に宣教師を迎へる事を痛く望んでゐた。併し、彼は諸侯の希望に添う事は他の機會に譲る事

とした。但し諫早の領主だけは例外で、彼の領地は、有馬領と大村領との間に挟まれてゐた。之より先、彼は自ら宣教師等の爲に住宅を提供した。領内には凡そ六千人のキリシタンがゐた。藤四郎殿(秀包)は、先に豊後の徳高きドン・フランシスコ(D. François)の女ドーナ・マキゼンス(D. Maxence)と結婚し、その數四千に及ぶ領内のキリシタンを大に保護し、自らは教の實行に没頭した。甲斐守は、嘗て迫害が起つたその始め頃、父官兵衛殿(Cambiorodoro)の勧誘によつて洗禮を受け、今や再びその教を聽かんことを願つた。その領内には約二千人のキリシタンがあつた。豊後には信者一萬二千人と數へられた。

新しい若干の駐在所が毛利殿の領内なるアマングチ(Amanguchi)や廣島(Hirochima)に出來たが、毛利殿は九ヶ國の領主で帝國の中でも家康に次ぐ大立物であつた。毛利殿の甥にして養子となつたその人(〇毛利輝元子なく同姓穂井田元清の次子宮松丸を養子とし天正十八年秀元と名づく、養子とは秀元の事)は、邸宅を山口に構えてゐた。この町のキリシタンは約五百人あり、何れも聖フランシスコ・ザベリヨが

傳道したその頃からの信者で、凡ゆる迫害の中を恙なく、堅く信仰を持ち續けて來たのであつた。

毛利殿は、又下(九)州と都との通路に當る港町下ノ關(Chimonoseki)に、宣教師二人の駐在所として相當な住宅を提供した。

肥前に於ては、改宗する者愈々増加し、新改宗者の中には、多數の士分の者があり、領主の縁戚の者さへも若干あつた。

信長の甥にして十七才の若者たる美濃の領主(○織田秀信)は、洗禮を受け、新しい會堂を建立した。

同じく京都でも、耶蘇會並にフランシスコ會の宣教師の努力により未信者の改宗する者は數えきれぬ程あつた。

神父ゼローム・デ・イエズスは、特に家康の保護を受け兼て都の宮殿の中に住居を與へられてゐた程で、なほ彼は、江戸に赴いて其處に一つの會堂を建ることが出來た。彼は五旬節の日、最初のミサ聖祭を執行つた。同年、家康は彼をマニラに遣はして、使節によき結果をもたらすやう斡旋せしめた。

故に氣力勇氣の資源は實によく準備が整つてゐた。働手の熱心は並はづれて居り、而も絶え間なき傳道は、全國に聖き火を點じた。さればその成果は、勞に應じて歴然たるものがあつた。

諸大名の間が表面上平和であつた中は、攝政官等は、太閤様の遺言成就の義務を果さんとし、太閤様を「新八幡」(Chinfaichiman)といふ名稱の下に「神」(Camis)即ち神列に加へたる英雄に擬し、彼の爲に莊麗なる社を建てたが、その設計は彼自身で引かしておいたものであつた。生前、彼は來世の存在せぬといふこと、並に靈魂は肉體と共に存在を絶つといふことを信じてゐたから、別に名を殘さうといふ望みはなく、一に子孫の尊崇を受ければそれでよいと思つてゐた。人々が彼の爲に建てた社は、帝國中最も廣大なるものであつた。そして太閤様の遺骸をそこに移し、又新しい神の像を安置したのは萬人に之を拜ませんが爲であつた。然るに彼の不幸な魂は落ちつく所を異にし、悪魔の永久なる玩弄物は、永へに地獄の火中にあつて苦しみを受けねばならなかつた。

同じその頃、日本人の偶像崇拜の蒙を啓くために我主は、奇蹟的な方法を以て、人間の贖罪の聖標を掲げ、以てその偉力をあらはし給うた。この記憶すべき事件が成就されたのは、ドン・アウガスチンの領内で、この祝福を受けた肥後には、夥しい改宗が行はれた。四月二十五日(○慶長四年閏三月一日)聖マルコの祝日に、八代城下の幼い子供の信者が、日本人の信者の例に倣つて、墓地の中で他の子供等と共に例の十字架の下で祈つてゐると、この十字架がさら／＼光り輝き出した。彼は今し方見たことを相手に話すと、今度又この子供等にも十字架の周りがその形の通りに光つてゐるのが見え出した。子供等がこの事を訴へると、町のキリシタンは皆かけつけて奇蹟の證人となつた。數週間は、この場所に人の集つて來ること非常なもので、有馬その他方々からやつて來た。或者は數々の十字架を見、又或者は僅かに一つの十字架を認めた。極く少數の者、恐らく資格の足りない者は何の光をも見なかつた。更に又折角やつて來ても主な十字架のみしか見とめなかつた多數のものは祈禱をな

しコントリサシ悔悛の祈を唱へた後漸く他のキリシタンと同様に澤山の十字架を見た。この顯現は三ヶ月間、夜晝つゞいた。その原因は不明であつたが、併し例によつてその結果は大なる救濟を導いた。牧師等は悔悛ペニタンスをなし、信仰の薄弱なる者どもは堅く信仰を守り、主が奇蹟の證人となつたことを讚めたゝえた。終に夥しき異教徒が授洗を望んだ。司教はパトリ神父等を召集して、十字架の出現の他に何等の奇蹟もおこらなかつたといふことを熟慮し、諸民が八代の聖なる十字架に對して熱心に信心すればそのまゝにしておくことにした。同時に彼は書を寄せてその場所に矢來をめぐらし、この十字架を、他の大なる十字架の中に嵌めこんで保存し、之を不敬に渡らない安全の場所におくやうに命じた。とかくする間、この出現は神の仕業であり、異常なる恩惠の一つで、要するに攝理がある期間信仰心を促し嚴肅なる試練に對して魂をソウとゞのへる爲に與へられたものであるといふことを結果が相かはらず示してゐた。實際八代の一地方だけで、二萬五千の人々が洗禮を受け、國を擧げて雄々しい

徳の竈となつた。

一五九八年中に、耶蘇會ではよき働手を二人失つた。一人は、神父アントニオ・ロペス(P. Antonio Lopez)で、生れはリスボン、長崎學林の學頭で、享年五十一歳、三十四年を耶蘇會に送つた。他の一人は、神父フルビオ・グレゴリオ(P. Fulvio Gregorio)で、ペルーズ(Pérouse)の人享年四十四歳、僧籍に在ること十八年であつた。

一五九九年には、又神父ジル・デ・ラ・マッタ(P. Gil de la matta)が海上で死んだが、萬事の様子から見て難船のためらしく、師は最近二度目にローマから戻つて來つたのであつた。彼がローマに行つたのは、會計係としてであつて、それから、又新に遣派されたのであつた。彼は二月、一ジャンクに乗つて、長崎を發して都に向ひ、爾來消息が全く知れなくなつた。同船には、七十人のポルトガル人が乗つてゐたが、何れも彼と運命を共にし、又傳道に使ふ金が四十萬クルザードス(Cruzados)(伊太利の金で約四十萬エクス ecus)(一クルザードは三フラン)積んであつたが、之も同じく紛失した。神父デ・ラ・

マッタはログロノ(Logrono)(カラオルラ Calahorra 教區)生れのエスパニヤ人で、享年五十一歳、耶蘇會にあること三十三年であつた。彼は四誓の誓願者であつた。

マカオの人々は、その年の船が來ないので、太閤様の没後、一大事が起つたのではないかと心を痛め、自分の方から船を出さなかつた。従つて、マカオにて品級を授けられた若い宣教師六人が補助をもつて傳道することを禁せられた。

その年も終の頃、ドン・アウガスチンは志岐に來つて、有馬侯の面前で堅信の秘蹟を受けた。降誕祭は異常なる熱心さを以て莊重に行はれた。新年は異教徒の儀式を以て屢々祝はれた。キリシタンが之を行はぬので異教徒はこれを機會に騒ぎた。司教は陰曆の年頭に御護オンモリノイトルダイムの我聖母の御名のもとにカトリック教の祭を制定した。但し、教會定式書の中にある割禮には、差支へることはなかつた。

(註一) Copia d'una breve relatione christianità di Giappone, del marzo di 1598 insino ad ottobre e della morte di Taicosama. Scritta dal P. Pasio. Alcuni avvisi mandati dal

P. Pietro Gomes. Venezia, 1600, 80. Lettera del P. Al. Varignano, visitatore... di 10 d'ottobre del 1599. Roma, 1603, 8. F. Guerreiro. Relaçam annual da India e Japão, nos annos de 600 e 601 (Faits du Japon de 1598-1599), Evora, 1608, 4. Fr. Juan de S. Maria. Chronica de la provincia de S. Joseph de los descálços de S. Francisco. Madrid, 1615, fo. t. II, l. III, c. 24 et ss.

(註二) 當時首府は二箇所あつていづれも政廳の所在地になつて居つた。一は京都、太閤様の建設にかゝり日本中最も豪華な伏見城は之に屬し、一は大阪にして同じく太閤はこゝにもう一つ大なる城を築いた。伏見には家康の傍輩なる攝政官及び京都以西の西國諸大名が居り、大阪には東國の諸大名並に幼君秀頼が居つた。

(註三) 神父ゴメス (P. Gomez) は一五九一年(○天正十九年)以來代理管區長を務めてゐた。

(註四) 最初神父アロンソ・ムノス (P. Alonso Munoz) が指定されて居つた。彼は姿を士にやつして乗船した。逆風のため仕方なく再びマニラに入つた。さかくする中に日本から歸つてゐたイエズス・デ・ゼロームは神父ゴメスと共に再び日本に引きかへすやうにさいふ命令を受けた。元日本にゐた他の宣教師二人の中の一人神父マルセル・デ・リバドネイラ (P. Marcel de Ribadeneira) は一五九七年(○慶長二年)の殉教に關する公文書をたづなげてエスパニヤに派遣された。もう一人の神父アウガスチン・ロドリゲス (P. Augustin Rodriguez) は一

六〇三年(○慶長八年)再び日本に渡つた。

(註五) 神父ゼロームが管區長に宛てたる書翰 (S. Maria. Chronique, t. II, r. III, e. 25) 翻譯あり、別冊附録第一號を見られよ。

(註六) イエズスのいさも聖なる御名と、いさも聖なる信仰を持續することによつて、配所にあつて加はる辛苦艱難を意に介せず、祖國、家、收入、田畑その他一切を失ひ捨てることを希ひ又その甲斐あることを快さした (Guerreiro, 1601 et s. II, c. II) — 譯者曰この項葡文。

第二章 一六〇〇年(慶長五年)(註一)

一般の教勢—死罪を言ひ渡された一婦人の雄々しき—大阪に於ける慈善基金—癩病院—收容された子供—先皇后の大奥に於けるキリシタン婦人—代理管區長神父ゴメスの死—攝政官同盟して内府様にあたる—丹後の大名夫人ドーナ・ガラシアの死—攝政官方の軍隊、伏見に放火す—内府様の軍隊、美濃の岐阜を占領して豊後を降す—決戦は内府様に有利—治部少ミドン・アウガスチン捕虜さなる—毛利殿、戦はずして降服す—宣教師等の危機—精神的並びに物質的損害—ドン・アウガスチンの本城宇土の攻圍と明渡し—大村に逃れた平戸の亡命者の隠忍—ドン・アウガスチンの監禁—ドン・アウガスチン及び治部少の迫害—アウガスチンの長男、暗殺せらる—オランダ人の遠征—按針アダムス—教皇クレメント八世の令書 Onerosi Pastoralis — 同教皇の親書。

一六〇〇年(慶長五年)の初の幾ヶ月かは、深い平和の中に過ぎた。家康は、漸時専斷となり、御門(Mikado)より内府様(O Daifoussama 萩野由之博士所藏)の稱號を下賜せられ、爾來この稱號を採用した。反對派は、くぢけて、一時は再び立つことが出来さうにもなかつた。以外なことに、此の帝國の狀況が、却つて宗教に對し好都合になつた。教會堂は津々浦々に再興されることとなり、新しい信者はいや増した。宣教師は到底一々要求の全部を充し切れなかつた。

當時、日本には、耶蘇會の神父・神弟合せて百九名あり、中十四名は、この年到着した者であつた。彼等は三十箇所の傳道所(メイゾン)、又は駐在所(レジダンス)に分れてゐたが、中六箇所が主要なるものであつた。彼等の肝煎で五十箇所の教會堂が再建せられ、新に五萬人のキリシタンが洗禮を受けた。

長崎の學頭の住宅には、駐在所の宣教師を加へて三十名の宣教師が居つた。その住宅には、一つの學院(ゼミナリヨ)が附屬して居り、其處には九十人の少年が

ゐて、文學や修辭學を學んでゐたが、その大部分が士分の者の子弟であつた。此少年達は、文學の課程がすむと、諸方に遣られ、神父等を扶けて、或は信者の教化に當り、或は天命を果すため艱難を嘗めるのであつた。彼等は、かゝる苦い試練を経た上で、始めて耶蘇會に入會することを許されるのであつた。

長崎は、ポルトガル人の出入の繁しい港で、當時四五千人の人口があつた。此年、司教は御護りの聖母(N. D. de la Protection)に獻げた一會堂の土臺を据ゑた。内海(ウチノウミ)(Ouchime)、外海(ホカノウミ)(Focanne)、並に古賀(Koga)(Corga)三箇所の駐在所が、長崎に從屬してゐた。(註二)深堀(フカホリ)(Foucafort)で傳道が行はれて、六百人の人を改宗させた。諫早(イサハヤ)(Isafay)では、領主(郷氏)が會堂のために土地を寄進し、尙同地では、一向宗(Icochous)の坊主七十二名は、自殺せんとして、遺書(リスト)をつくりかけてゐたのであつたが、改宗して命を永らへ、靈魂の救ひを求めることになつた。

大傳道所と駐在所とのある大村には(註三)、四名

の神父パドレと七名の神弟イルマンとが居つた。國中舉げてカトリック教信者であつた。他國から來たもので洗禮を受けたものが六百人あつた(註四)。

學頭の住宅と、それに從屬した五つの駐在所の所在地なる有馬には(註五)、十四名の宣教師が居つた。この國は、人口七萬、悉くキリシタンであつた。なほ六百人の外國人が洗禮を受けた。

有馬の領主ドン・プロタジヨ(Ord. Protais 有馬晴)は、世子(直純靈 名ミゲル)のために隱退して、一美邸に移り住まうとしてゐた。彼は、神父等が粗末な家に住つてゐるのを知るや、彼等に其邸宅を譲つて、そこに學院や會堂、さては駐在所を建て、やつた。同じくこの領主は、信心深い夫人(コソバニユ)のドーナ・ジュスタ(D. Justa)の加勢を得て、他にもう一つ會堂を建てた。

ドン・アウガスチンの領地志岐と天草の島にあつては、當時司教のゐた志岐の學頭の住宅は、三つの駐在所が附屬してゐて(註六)、六名の神父と十名の神弟とを有してゐた。國中舉げてキリシタンで、外來の者三百人が洗禮を受け、諸方の駐在所

内に新に七つの會堂が出来た。然るに、四十五の會堂が山間に散在して居て、それは是等の會堂を歴訪する任に當つた二人の宣教師にとつて、並大抵の事ではなかつた。

ドン・アウガスチンの本領たる肥後では、宇土の住宅に駐在所が附屬してゐて(註七)、五名の神父と七名の神弟とが居つた。既に、一萬人の信者があつたのであつたが、其上に尙ほ一萬七千人の新受洗者が出来た。此國の異教徒(ゼンチヨ)は、一向宗に屬してゐた。彼等は、宣教師が子供を食べるとか、瀕死の人の眼玉を抉りぬくとか、又死人の膽(キモ)をとつて毒藥や媚藥(フイトル)を作るとか云つては中傷した。同時に、彼等は一步を進めて、神父や問答師の毒殺を計つた。

ドン・アウガスチンの甥チウエモンド(Ord. O'rahno 忠右 衛門殿)は、十七才の若者にして隈ノ庄(Counano 庄)や、領内の者全部を改宗させた張本人であつた。かくて三千人の受洗者が出来た。チウエモンド(Ord. O'rahno 忠右 衛門殿)が坊主共に言ひ渡したことは、キリシタンになるか國を立退くか、といふことであつた。六

人だけが改宗し、其他の者は立退いた。

八代及びノヅイ(Nonzouji 野津のこゝならん)の地方には、新に十

四の會堂が出来たが、それは奉行にしてドン・アウ

ガスチンの家老ジャック・ミマサカドノ(O Jacques Minasadono 美作)の命令によるのであつた。

或素晴らしい寺院の長老であつた一老僧は偶像を破毀して其寺を會堂

にした。矢部(Vabe)はアウガスチンの今一人の家

職ジョルジ・ヤフィンジドノ(Giorges Yofingidono 假字 ジョルジュ・彌平次殿、未考)

の治めるところであつたが、新に洗禮を受けた者が

千五百人あつた。

毛利殿の領内では、廣島(Firochima)・山口二

箇所の駐在所が、相變らず隆盛で、坊主の告訴

や、彼等の頭の一人で毛利の顧問なるアンコスジ

(Anosudgi 安國寺惠境)の悪意も關せず焉であつた。毛利殿は、

彼等を保護することを止めなつた。それは、長崎

のポルトガル人との通商を失ひたくないからであ

つた。

豊前にては、二名の神父と一名の神弟、それか

ら二千人のキリシタンが居つた(註八)。豊前の領主

ドン・シメオン小寺官兵衛殿(O D. Simcon Condera Cambioidono 黒田孝高、幼

字萬吉、後官兵衛と稱す、名は祐隆、後また孝隆、孝高と改め入道して如水と號す、父職隆の時よりして一時小寺氏を冒せしが後

黒田氏に復す(靈名シメオン)は、世子甲斐守(O長政)の爲に隱居し、た

まに支配することのあるといへば、甲斐守の留守

の間だけであつた。父は、最初の中立派なキリシタ

ンで、未だ年は行かない世子に洗禮を受けさせて

おいた程であつた。然るに、彼が朝鮮征伐に従

つて留守の間に、世子は宗教のことを良く知らず

して成長し、自分では歸朝後も相變らず信者であ

し通して日を送つたが、左程熱心でも無かつた。

豊後の教會は、余り大した結果を生まなかつた。

それといふも、之等の領主が二人とも大して氣乗

りしてゐなかつたからであつた。それでも、シメオ

ンの弟惣右衛門殿(O Soienondono 黒田惣右衛門直之職高の四男にして孝高の弟、筑前秋月の城主)

の領内には、洗禮を受けた者が六百人もあつた。

偕て、我々の年報(アナル)は、死刑の宣告を受けた婦

人の眞に壯烈な死について物語つてゐる(註九)。其

夫が、或罪のために、刑の言ひ渡しを受けてゐた

のであつたが、姿をくらししてしまつた。日本の

掟に従へば、若し夫が再び姿を見せなければ、女

房は牢につながれて一年の後には死刑に處せられ

ることになつてゐた。彼女は、牢につながれてゐる間に、説教を聞いたり洗禮を授かつたりして、そして兎に角、キリシタンになつて死に、靈魂の助かりを得たいと望んだ。とう／＼夫が姿を見せない

ので、彼女は、磔刑の宣告を受けた。ところが彼女は、ある立派な家柄に屬し、一個として考へて見ると何の罪科もない者なので、役人は、マシストラ刑場

まで駕籠に乗つて行くことを許した。然るにこの婦人は、なほも専ら受洗の恩恵に浴せんことのみ憂身をやつし、折角の好意を言斷つた。蓋し、

何事か耐え忍ぶ力を得、十字架の死を愛されたが故に、徒歩にて行かれ磔刑を受けられた、イエズスに倣ふためであつた。判官は、十字架につけない

中に殺す手筈にしてゐた。それは、極くさういふ罪を犯した罪人とか、殊に婦人に對してはさう

するのが例であつた。萬人を救濟せんがために、忌はしき十字架上の露と消え給へる至聖なる主にならつて、十字架上に死せんことを只管に望むばかりに、この恩典を拒絶した。此信仰の驚くべき

行爲は、延いて婦人の家族二十人の改宗となり、

何れも國中でも最も立派なキリシタンになつた。後に、シメオンは衷心から天主の教に立ちかへり、其宗教的信仰が、受けなければならなかつたひどい艱難、その最中でも慰安となつた。

筑後の久留米(Corume)は、毛利殿(○毛利輝元の父その夫人は豊後のドン・フランシスコの女のドーナ・マキゼンスであつた)の父方の叔父にして

豊前のドン・フランシスコの女の夫なるシモン秀包殿(Findaradono. ○秀包は元就の末子にして輝元にまじり父方の叔父に當る)の領分であつた。一神父は、その地に赴いて、七百人の異教徒

に洗禮を授けた。此神父は、一神弟と共に一定の駐在所に止まり、新に千九百人の異教徒に洗禮を授け、會堂を二つ建てた。領主は、命令を下し、

總て死刑の宣告を受けた者は、若し其人が異教徒であつたならば、出来ることなら刑の執行の前に、教理を説き聞かせて改宗させるやうにといふ事であつた。それから罪を得たキリシタンを寸斷して

太刀を試すことを禁じた。數名の異教徒の領主が互に分有してゐた豊後には、千五百人の信者がゐた。神父一人と神弟一人

とがこの國を訪問したが、何の故障も起らなかつ

た(註一〇)。

神父一人に神弟一人が、筑前、肥前並に對馬(Iso-usima)及び五島(Goto)の島々を歴訪した。筑前や肥前には、多數のキリシタンが居つた(註一一)。對馬の領主(義智)の夫人は、ドン・アウガスチンの女ドーナ・マリア(Dona Maria)であつた。

帝室の御領地五畿内(Gokinai)とそれに隣接する諸州に、耶蘇會では大阪及び京都に各々一箇所傳道所を持つてゐた。神父四人(オルガンチノとモレジン(Morejon)と日本人の神父二人)と、神弟八人とがゐて、聖職を執行つてゐた。その頃まで彼等は、借家の佗住ひをして來たのであつた。此年傳道所が二つ出來た。大阪の長老(スベリウール)オルガンチノ師は、信徒の援助を得て、立派な建物の土臺を据えた。この二つの駐在所には、領主のお陰を以て、最も優秀な説教師が數人ゐた。三千四百人の受洗者があつたが、中には内府様の重臣で洗禮を受けた者も多數あつた。新しい信者の中には一人公家(Counge)出身の大名があつて、彼が改宗したのは、耶蘇會の神弟(イェルマン)をしてゐる息子のためであつた。

彼が神父等(パイデル)のために、内府様や攝政等に謁を求めたことは、一再に止まらなかつた。之がため、神父等は、再び公然一般人の生活に入り込むやうになつた。同じく、一神弟(イェルマン)は、神父オルガンチノは遣はされて、内府様の世子にして父に代つて關東(Couanto)八州を治めてゐた江戸中納言殿(Yendo-tchoumagadono 徳川秀忠は文祿元年九月)を訪問した。(從三位格中納言となり世人彼を江戸中納言と稱す)

ドン・アウガスチンは、大阪に癩病院(レプロソリ)を建てた。癩病人は、通例なすべきやうもなければ薬とでもなくて路傍に流浪してゐた。彼等のために出來た病院は、いたく異教徒に感銘を與へた(註一二)。同じくこの領主は、捨子救濟の資金として、年に米百石(Bocous)宛を出すことにした(註一三)。神父オルガンチノは、此補助金を以て、子供等を信者の家に預けて養育して貰つた。それでも、絶えずつとめて、異教徒の日本人の習慣で養つて行くことが出來ないからといつて、赤子を殺すといつたやうなさういふ母親の手から子供をひきとるやうにしてゐた。ドン・アウガスチンは、別に又堺に敷地

を求めて、會堂、住宅並に墓地に宛てることにした。

京都ミヤコに隣接した諸州でも、宣教師を求めてゐたが、思ふに任せず、僅に大阪や京都の神父等の訪問を受ける位のものであつた。かくて、神父等は、ジュスト右近殿(Justo Oncoudono 高山長房一に友祥、右近將監と稱す薙髮して南坊又等伯と稱す靈名ジュスト)の舊領、高槻の山間に分け入つた。かの右近殿は、政治的の有爲轉變にあひ、其結果異教徒の大名に(○越前前田利家)歸屬して居つた。その住民は、悉くキリシタンで、未信者が彼等の中にあることを許さなかつた。キリシタンになつた坊主共の力によつて、百姓達は其大部分が改宗した。

備前(Bigen)には、又大層感心な住民がゐた。この國の領主、備前中納言殿(○宇喜田秀家)は、三ヶ國を領有してゐたが、異教徒であつた。併し、彼の從弟のジャン明石掃部殿(○Jean Aechicamondono 明掃部助 守重、又全登といふ靈名ジャン)が領主に代つてその領分を治めてゐた。この國內には新に改宗した者が二千人あつた。而して筑後に於けると同様、法や習慣の上から死刑の宣告を受けたものの命乞をすることが不可能であつた。

め、かうした不幸な人の改宗を企て以て靈魂を救ふことにした。

廣大なる町たる京都ミヤコは、上京(Meaco superieur)と下京(Meaco enferieur)とに分れてゐた。下京には、内裏(Dairi)や主なる重臣、顧問官である公卿(Coringhes)が住つてゐた、伏見城は下京に連なり、その間一リユウあつた。下京には傳道所が前からあつて、此年そこに慈善院(une maison de la misericorde)を建てた。上京の人氣がだん／＼よくなつて來たために、新信者達は、會堂を一つとそれにも如何にも粗末な傳道所を一つ建てた。

大閣様の正室たりし政所マンドロ様(○Mandoorosama 北の八重)は、豪華なる御殿に隱居してゐた。彼女は、アウガスチン(○小西行長)の母マドレナ(Madolena)と同じく同名の妹カタリナ(Catherine)とを右筆として召し抱えてゐた。此二人の婦人は、美德の大なる模範となつた。皇后は、此二人の婦人に感心し、自由に外出して宗教的禮儀を果すことを自由にしておいた。又兩人は、朋輩を澤山改宗させた。マダレナは、此年に歿した。

宣教師等は京都から、更に美濃(Mino)次で尾張(Owari)を訪れた。尾張には多數の受洗者があつたが、殊に該國有力な大名福島殿(○Fukuchimadono 尾張清洲城に入り 二十萬石を食む)家中の貴族十人の受洗があつた。美濃の要市岐阜(Gifu)は、信長(Nobunaga)の孫であり、同時に嫡嗣たる中納言殿(○Tchoungandono 織田秀信織田信長の嫡子 信忠の子にして慶長元年五月 月權中納言從三位に進む)の首府であつた、太閤様は彼を退けて帝國を潛奮したのであつた。彼は、美濃の主要部を領有してゐた。この領主は、十七歳の時、既にキリシタンになつたが、それを太閤様故に祕密にしてあつた。今や彼は、堂々とキリシタンたることを名乗り出た。彼は會堂を建て、且つ年金を出して神父十人の支持費に當てた。彼は更に貧しい人々の爲に病院を建てたいと希つた。岐阜では、實に夥しい改宗者があつた。

耶蘇會では、此年悲しくも代理管區長ペドロ・ゴメス師(P. Pedro Gomez)を失つた。師は、二月一日(○慶長四年十一月十七日)、突然主の御許に召されたのであつたが、前既に長年の傳道中確固たる覺悟が出来て居つた。享年六十五歳、耶蘇會に盡すこと四十六

年、日本にあつて傳道に従事すること十七年であつた。嘗て彼は、この傳道を二十五年間と天主に願つたのであつたが、左程長いことをお願ひしたとは思はなかつた。彼は引續いて豊後に於ける宣教師、それから長老(スベリウ)をつとめ、一五九一年(○天正十九年)以來は、代理管區長を勤めて來た。彼は一五九四年(○文祿三年)の年報、一五九七年(○慶長二年)の殉教の報告次いで一五九八年(○慶長三年)に有益な意見書を書いて出した。彼は又日本の耶蘇會でもつてゐた印刷機械をもつて多數の書物を印行せしめたのであるが、(○日本のイエズス會印行の書にして現存するもの、○の國字本ローマ字本合せて二十五種を數ふ)就中、一五九八年(○慶長三年)、天草に於て、殉教者の秀逸なることについて小冊子(○一五九八年に印行せられたるものは大英博物館及ライデン大學に存する落葉集他はローマのカサナテンセ文庫に存する Saluator mundi なり、こゝに記す殉教者の秀逸なることについて)を印行した。彼の後繼者として神父フランシスコ・パエス(P. Francois Pæz)がその任に當つた(註一四)。

兎角する中に、攝政等は内府様の野望を抑へるを得ず、同盟して彼に當り、肥前殿(○前田利長)を頭に戴いた。謀反者の張本人は、大老の一人カゲヤス

ると脅かした。小笠原殿は、夫人にその夫の命を傳へた。ドーナ・ガラシヤは、運命に忍従して、祈禱所オラトリールに入つて祈り、次いで侍婢たちには後に残るやうにいひ含めた。實際彼女等をして御殿を引き下らせた。家來の面々はどうかといふに、彼等は間違つた、武士の面目といふことに心を動かされて自殺するといつてきかなかつた。ガラシヤは跪いて劔に首をのべた。家來達は隣室に行つて御殿に火をかけた上で切腹した。總てのもの皆灰燼に歸した。

ガラシヤ夫人は凡ゆる美德の完璧な龜鑑であつた。彼女は、久しい前から如何なる事變に遭はうとも、それに對する覺悟は出來て居り、又神の思召に従つて、死ぬることを一種の罪滅しとして、進んで受け容れたのであつた。彼女は、息子と娘二人を基督教の中に育つて來たのであつた。彼女は、多數の棄子を邸内に引きとり、又常に五六名の耶蘇會の宣教師を養つてゐた(註一五)。

心から彼女を愛してゐた夫は、彼女にいつまでも深い心残がしてならなかつた。神父オルガンチ

ノは、夫人の遺骨の一部を集めさせて彼等(○宣教師)に壯嚴な葬式を執行せしめた、ために領主はこの慈愛の行爲にいたく感激した。

攝政官の面々は、十萬人の兵を召集した。彼等は、内府様に對抗して支へて居た天下、即ち皇帝の領地の唯一の町である伏見を圍み、これに火を放つた。籠城兵は、出でて何れも酷い虐殺に遭つた。かくて、太閤様の豪壯なる宮殿は、壞滅した。攝政官は、更に京都から三リュウ離れた、小さな城砦、大津(Osou)、それから伊勢(Iche)にあつた他の三つの要塞を占領した。併し、彼等の成功もそこで行きつまつた。

何れも内府様の部將なる尾張(Voyti)の大名福オフランス島殿、丹後の大名長岡越中殿、豊前の大名にしてシメオン官兵衛殿の子なる甲斐守(○黒田長政)等は三萬の兵を率ゐて進軍し、美濃に於ける岐阜の城砦を奪つて、その城主中納言殿(○織田秀信)を虜にした。

彼等は、其處から更に治部少が據つてゐた他の要塞に向つて進み、夫々勝利を得た。此間に、薩摩(Satsouma)の領主とドン・アウガスチンとは治

部少と連合した。

同時に、豊前の領主シメオン官兵衛殿は、ドン・フランシスコ(○大友)の子ドン・コンスタンチン(義鎮)が守つて居た豊後に侵入した。シメオンは(○義統)が守つて居た豊後に侵入した。シメオンはコンスタンチンを虜にし、殆んど此國全部の領主となつた。

既に肥後半ヶ國の領主であつた主計殿(○Carazouy, adono 加藤主計頭)は、ドン・アウガスチンに屬してゐた他の半ヶ國を攻めて、その首府宇土(○Uto)を圍んだ。

宗教にとつて幸なことに、シモ(○九州)の諸大名は相反目してゐた。孰れもキリシタンであつた、有馬の大名と大村の大名とは、内府様の方に味方してゐた。之が爲に教會は助かつた(註一六)。

間もなく、天下分ヶ目の危機が來た。攝政官の面々は、八萬の兵を率ゐて、内府様と戦を交へた。内府様は僅に五萬の兵しか擁してゐなかつた。然るに裏切者か出た爲に、釣合がとれた。筑前(○名島)の大名中納言殿(○Chinagandono 中納言殿小早川秀秋)は、内府様の方に移り、又毛利殿の兵は戦はずして退いて、大阪に引上げ、其主君に再會した。内府様は、完全

に勝利を得た。數多の部將(シエフ)は、手ら兵卒を殺し、或は敗北の後切腹した。治部少とドン・アウガスチンとは虜になつた。何れも自殺はしなかつた。その理由は、ドン・アウガスチンはキリシタンなるが爲であり、治部少は、氣を失つたが爲であつた。

内府様は勝を制して、治部少の所領美濃と近江(○mi)の佐和山(Savoyama)城を占領した。其地を預つてゐた治部少の兄(○石田 正澄)は、財産を士卒に分配して兄の夫人子供等を殺し、城に火をかけて切腹した。

薩摩の領主(○鳥津 義弘)は、勇敢なる退却をした。戰の眞最中、彼は七十人の兵を率ゐて敵中を突破し、内府様の到着前、大阪に退いた。彼は、大阪で乗船し、二百リユー突きつて自領に歸り、其地にてすつかり感心してゐた其敵から高い置位を得た。

(要するに薩摩日三州に互る本領を安堵されたることを指す)

毛利殿は、大阪にあつては、幼君の主であり秀頼や諸大名の總ての財寶の持主であつた内府様の宮殿にたてこもり、なほ四萬の兵に將としてゐたのであつたが、敢て己が身の安全を計らはうとせ

ず、又敢て安堵し得た己が領地に退かうともしなかつた。併し彼は遂に降つた。

内府様は都ミヤコに凱旋し、幾もなくして日本國中擧げて彼に屈服した。

當時、彼は頗る有力にして、毛利殿から七箇國を沒收して、之を關東八州に併合した。

戦争のあつた二箇月間、宣教師等が大なる危険に遭遇したのは、特に長崎であつて、同所には司教 (évêque) や巡察員 (visiteur) 代理管區長 (Vice-Provincial) の諸神父がゐた。聖者ヨブ (Job) の如く、時々刻々新しい、艱難試練と新しい苦痛とがふりかゝつて來た。宣教師等が殊に心配したのは、内府様がドン・アウガスチンの故に、宗教に對して氣嫌を損じはせぬかと云ふことであつた。キリシタンの蹉躓墮落するのも無理ないことであり、異教徒が『一體奴等の天主つて何處にゐるのだ』といふのも無理ない事であつた。然るに、一方では又極く僅かの間ではあつたが、信者は平穩無事で、その教會堂を再興することが出來たこともあつたのだ！併し、尙ほ祈禱は、絶えず續けられ、

天主デウスは、奉仕者に慈悲を垂れ給うた。但し、精神的並に物質的損害は莫大であつた。

美濃の大名中納言殿(織田秀信)は、諸大名並に大部分がキリシタンたる臣下の重臣・下士卒の亡命地たる高野 (Coya) に幽閉せられてゐる間に、知行を失つた。

キリシタン大名ドン・ジャン明石掃部殿 (D. Jean. Acachicamandono) は、備前の大名(宇喜多秀家)の従弟であり、同國の奉行にして、一城を有し、三千人のキリシタンを擁してゐた。信者は、悉く殺されるか、或は追放された。如何にも改宗したげに見えた大名その人は、戰爭中斃れた(秀家がそれ逃れ島津氏に依り、數年の後慶長十一年四月伊豆八丈島に流され明暦元年十一月八十三才の高齡を以て死せることは今更いふまでもない事)高徳のシモン・ヒデナドノ(Simon Fidenadono 毛利秀包 Fidenadono 是 Fidecanedono の誤先に 出でたる藤四郎殿に同じ)の所領筑後の久留米には、七千人のキリシタンがゐた。この領主は、其領國を失つた。そこにあつた駐在所は毀たれ、かくて信徒は、大部分追放された。廣島や山口にても、信者は同様の苦しみを受けた。そして眞に次の如くさへる。 *Propter te mortificamur tota die: esti-*

mati sumus sicut oves occisionis. (我々は終日、汝の爲に苦行する、我々は殺された羊の如くに思はれた。)

併し、最も不幸な目にあつたのは、ドン・アウガスチンの主城宇土の城とその領内とであつた。ドン・アウガスチンの領地には、天草や志岐の島も含めて十萬人のキリシタンがゐた。領内には、耶蘇會の傳道所は七箇所にあつた。主計殿(○加藤清正)は、

來つて宇土を圍み、其籠城兵は、勇敢に防戦に之れつとめた。籠城兵の中には、二名の神父と三名の神弟と若干名の問答師が交つてゐた。主計(○殿なし)の望むところは、宣教師を雇つて調停者となし、之によつて城の明渡しをさせようと言ふのであつた。其處で、彼は、長崎滞在の巡察員と代理管區

長の二神父に對し相談に及んだ。此巡察員と代理管區長とは、若し自分等が政治に喙を容れたならば、日本のキリシタンに對して悪い感じを起させるであらうといふことを口實にして、宣教師らしく又外國人らしい行動をとつた。ために、主計は、激昂して神父等を脅迫した。併し宣教師は、仲々

屈せず、籠城兵の方も依然抵抗しつゞけてゐた。兎角する中にドン・アウガスチンの一家老(オライシエ)が宇土に到着したが、それは敗戦と大將が捕虜になつたといふ不吉な報を齎らした使者であつた。彼等は、今や其領主を失つて戦ふ必要がなくなつたので、けりをつける決心をした。要塞は明渡されたが、主計はドン・アウガスチンの兄弟(○未考)たる大將を死刑に處した。

主計は、宣教師や其奉仕者達を監禁した。彼等の難儀は、一通りでなく、學頭アルフォンソ・ゴンスアルズエス師(P. Recteur Alphonse Gonsalvez)は、釋放後疲勞のために長崎で逝去するに至つた。時に一六〇一年三月(註一七)の事であつた。

キリシタン大名ドン・ジャク・ミマサカ(D. Jacques Mimasaca)は、ドン・アウガスチンが八代の代官(トマンダ)で五百人の人々をひきつれて薩摩領に避難したが、後一命令を受けた。彼は其邸内の神父等を伴ひ長崎に送りどゞける事が出来た。

志摩殿(○寺澤志摩守)が、長崎に到來したといふことは、大恐惶の一つであつた。この大名は、内府様から

九州全體を統治する權力を與へられ、自然有馬や大村の領分もその權力下にある譯であつて、漸く大村に逃げて來てゐた平戸の亡命者達に棄教させようと思つたが、それは徒勞であつた。さうした亡命者達の頭分で、平戸の大名の親戚で國內で一番先に洗禮を受けた領主ドン・アントニオ(○籠手田左衛門尉)の孫に當るドン・ゼローム(D. Jerome)と、その子ドン・トマス(D. Thomas)は、殆ど手のつけやうもなく、他の者達が又悉く之にならつた。終に、彼等は其なすが儘に放つておかれた。

ドン・アウガスチンは、依然監督の身で、やがて不幸の極が、目前に迫つて來てゐた。嘗てはシモ(○九州)の總監シユールアンダン又大將となり、次で、天晴二十萬の大軍を率ゐて朝鮮の役に従つたことのある彼も、今や不名譽な死に様をすべき破目に陥つた。斯の如く現世で大なる不幸を嘗め、又イエズス・キリストの苦痛の杯を飲みほすといふ事は、實に宿命の徴ではなかつたか。彼は、同じくキリシタン大名なる甲斐守の前に引き出され、神父を一人待て告白したいといふ唯一つの望を出したばかりであつた。

取り敢ず、此願の向を内府様に傳へたところ、内府様は其譯がのみこめず、たゞ何か策略ではないかと疑つて承知しなかつた。次でドン・アウガスチンは、大阪に連れて行かれたが、大阪でもやはりかうした宗教上の斡旋をする爲彼の傍に近寄る事は出来なかつた。併し、彼は最近の戦争(○關ヶ原の役)前に告白はしてあつたし、又彼の先の意向と、始終痛悔をして居つたこと並に、天主に一身を捧げてゐたさうした事から、彼は天上の榮冠に價したのであらう、彼が心こめて望んでゐた事は許された。

愈々治部少、ドン・アウガスチン、並に毛利殿の顧問官たる坊主安國寺に對して最後の判決が下つた。此三人は、何れも、不名譽にも、駄馬シヤリオに乗せられて大阪の町々を引き廻され、更に大八車シヤリオのせられて、京都の町々を引き廻された。治部少が一番の重罪人として、一番先頭、次に坊主、次にドン・アウガスチンといふ順であつた。ドン・アウガスチン一人だけは、平然としてゐたが、他の二人の朋輩は、全く氣を失つて死人も同然であつた。一人のキリシタンがドン・アウガスチンに近づい

て來て、宣教師等が近づかうとしていろく手をつくしたが、駄目であつたといひ、だからもう自分で眞心から一生懸命痛悔するやうにと勧めた。

彼は、自分の罪を深く悔悟して居り、滿腔より神の恩寵にたよつてゐると答へた。彼は嘗て手離したこのない念珠と尊い御像とを手執つた。夫

といふのは、嘗てはシャル、五世(Charles Quint)の御尊妹なる葡萄牙王妃ドーナ・カタリナ(Dona Catherina)殿下の所藏品で、我主イエズス・キリス

トと聖母の御影を表したものであつた。途中坊主共は、彼に惡辣なことをしむけた。例へば、偉い大名の御不例といふやうな場合の他、それこそ滅多に出て來るやうなこのない特に位高き一坊主(○七條道上人)が出て來て、他二人の者にしたと同じやうに、異教徒が聖典としてゐる本に接吻し、又之

を頭上に頂かせることをドン・アウガスチンに望んだ。アウガスチンは、猛烈な勢で坊主を突きつけた。彼は、刑場に着くと膝まづいて祈り、死刑執行人の前に首をのべた。漸く第三撃で彼の首は落ちた。(○小西は切支丹にて、唐銅の板に、己が宗旨のはた物佛を畫きたるを首にかけ渡されける間、是も十念

を不渡、上人空しく歸るの)キリシタン等は、彼の遺骸を記事慶長見聞書に見える)覆ふに弔衣をもつてし、祕かに之を京都の耶蘇會の傳道所に移し、宣教師等は、彼を其處に埋葬した。彼の靈魂(アニマ)の爲に、數多のミサが行はれたが、それは單に日本ばかりでなく、ヨーロッパに於ても耶蘇會の總長の命令により、大恩人としてミサ聖祭が執行はれた。

年齢十二才のアウガスチンの長男(○未考)は、毛利殿(アウ・コンデユイ)の手形をもつて、その領内に避難した。然るに、彼は死刑に處せられる事を案じて廣島の宣教師を呼んで白告した。幾くもなく、果して毛利殿は、約束を破つて此少年の首を刎ねた。併し此少年は、キリシタンになつて死ぬことが出來た。毛利殿は、其犠牲者の首級を内府様の許に送つた。ところ内府様は、此蠻行を非常に怒つた。

此年始めて、一オランダ船が嵐に遭つて、日本に着岸した。其乗組員の大部分は、既に死んでしまつてゐた。が、元イギリス人なる按針アダムス(Adams)は、日本に永住することとなり、やがてオランダ人や其同胞に對し道を開く事となつた。

エスバニヤと交戦中なるオランダ人は、半島(Peninsule 即ちイベリア半島)の諸港を閉ざされ、ヨーロッパ全土との通商關係を失つてより以來、遠く遠征を試みて、其中に幸福を回收し、更に新しい國を發見することを夢見てゐた。初め、彼等は、印度に於けるポルトガル人や、エスバニヤ人の異常な成功を嫉視してゐた。又十六世紀の所謂新教徒の間に非常に激烈であつた、宗教的憎惡(Odium theologicum)が征服慾を刺戟したことは、非常なものであつた。諸會社が設立せられ、艦隊を艤装したが、之といふも何れも印度に航せんが爲で、或ものはアメリカの北東を通過し、或ものは北極を廻り、又或ものは喜望峰乃至はマジエラン海峽を通つて行かうとした。之等の遠征は、種々成功を収めた後、結局アジアに於て一方オランダ人とイギリス人、他方ポルトガル人、エスバニヤ人との間に久しきに渡る競争を促すこととなり、結局勝味は前者に歸した。カトリック教は、初めの程は、若干のエスバニヤ人やポルトガル人の不謹慎と罪惡との爲に、苦しまなければならなかつたが、此頃になると、

又オランダ人やイギリス人の血漣い迫害に遭つて實に慘い苦しみを受けた。その嘆かはしき結果に就いては、後で語ることにしよう。

一六〇〇年(○慶長五年)日本に着いた船は、シャテリ(Ola Charité 即ちオランダ語でいふ Trefde 慈悲號) (エラスムス(Erasmus)と云ひ、ジャックスマヘイ(Jacques Mahay)) によつて率ゐられた五隻よりなる艦隊に屬するものであつた。此艦隊が受けた使命といふのは、マジエラン海峽をよぎつて印度に赴くことであつて、一五九八年六月二十七日(○慶長三年五月二十四日)にオランダを出帆したのであつた。

シャリテ號(フリテ號)には水先案内として、アダムスといふスコットランド人が乗つてゐて、彼は、同國の船商から鞍替してオランダ人に仕へてゐた。提督は、此航海の當初に逝き、水兵のそれこそ大部分は、或者は病氣で、又或者は飢餓の爲に死んでしまつた。それから、六十人以上は、蠻人の餌食となつた。

シャリテ號(フリテ號)及び其れに同行して來た快走船は南海で他の諸船と離れて了つた。此離れた諸

船の中二隻は、オランダに引返して、一六〇〇年七月同地についた。其他の中一隻は、エスバニヤ人に捕獲された。シャリテ號と快走船とは、大洋の島々の中を漂流し續けてゐる中に、乗組員は、極く

少數になつてしまつた。一六〇〇年二月(○慶長四年十二月)

(慶長五年一月)、兩船は、風の爲に離れ／＼となり、快走船

は行方が知れなくなつた。終に、四月十一日(○慶長五年三月十日)、

シャリテ號は、殆んど役にた／＼なくなり、豊後で日本の海岸を發見した。同船には、出帆の際

百十人乗組んでゐた者が約二十五人生き残つて

ゐた。其筋のものから政廳(シール)に報じた。ポルトガル

人は、新に到着した者がオランダ人だと分ると

彼等を密輸入者であり海賊であると訴へた。五月

十二日(○慶長五年三月十八日)、家康は、按針アダムスと他に

水兵一人とを大阪に於て引見した。アダムスがい

ふのには、我國ではずつと以前から、其艦隊をも

つて東印度を訪問させ、其有力なる諸王と提携し

て、通商を望んでゐたといふことであつた。家康

は、彼に御身が君主は他國民と交戦中か否かと質

ねた。按針は『目下ポルトガル人及びエスバニヤ

人とは交戦中であるが、其他は世界中何れの國民とも平和の關係にある』と答へた。彼は、又其信仰は何かと質ねられ、自分は天地の創造者(デウス)を信じてゐると答へた。

アダムスは、公に若干の商品見本、即ち羊毛織物、緋羅紗、鏡、義山(ギヤマ)、珊瑚細工其他フランドルの珍奇の品々等、其難航の殘物を献上した。

謁見後アダムスは、四十日間、嚴重に監禁されてゐた。ポルトガル人は、宗教的な動機とエスバ

ニヤ王に對する低國(○Pays-Bas) (即ちオランダ)の謀反、それから

又貿易の原料に根ざした競争からオランダ等に好意を寄せてゐなかつた。然るに、家康は國是に照

し、其船を難破船と見做して沒收し、之を江戸灣

に引いて來るやうに命令を下すと同時に、監禁し

ておいた者を放免した。彼は、船に積んであつた

相當多い大砲、小銃、並に夥しい火藥を悉く沒收

した(註一八)。アダムスと其同僚とは、寛大の取扱

を受け、次で邸宅をあてがはれた。併し、同時に、

歸國の望を永久に捨つべきことを通じた。アダム

スは、家康の爲に小船を建造し、更に幾何學や數

學の初歩を教へた。五年の後、彼は妻子の許に歸らして貰ひたいと願ひ出たが、それは駄目であつた。シヤリテ號(フリ)の船長と水兵の一人だけが僅に、マラッカの海岸のパタニ(Patani)に商賣に行く、平戸の大名の一ジャンクに乗つて日本を後にすることが出来た。船長はオランダの一艦隊の中に入つて働くこととなり、ポルトガル人との海戦に斃れた。

アダムスの勸告は、他のオランダ船が來航に貢獻し、而も自身は、カトリック教の爲に害を爲す事屢々であつた。彼は、一六二〇年(元和六年)日本にて死歿した(註一九)。

一六〇〇年十二月十二日(慶長五年十一月七日)、教皇クレメント八世(Clement VIII)は、ポルトガル王として行動せるエスパニヤ王フィリップ三世(Philippe III)の願に基いて、耶蘇會の爲に下附された、一五八五年一月二十八日附(天正十二年十月二十八日)の前教皇グレゴリヨ十三世(Gregorie XIII)が親書に抵觸した令書 *Onerosa Pastoralis officii cura* を發布して元來耶蘇會の會員のみに限られてゐた日本に福音

をのべ傳へる特權を、他の諸教團、殊にフランシスコ會(Ordre mendians)に與へた。教皇が新なる宣教師等に課した條件は、ポルトガルの旗の下にゴアを通つて印度に行く事とし、フィリピンや西印度からでは宜しくないといふのであつた。諸教團相互の間に起つた意見の衝突の解決は、ことが仲々容易ならぬといふ場合には、教皇の名代人から、使徒の權威に任せるやうにといふことをすゝめて、これを本司教に委任した。同じ日付で、而も同じ考で案出された一親書の實施に備へてあつた(註二〇)。諸教團の受けた此條件附の特許は、目的として、これ等の教團の希望に添う可きであり、同時に近頃マニラに設立されたフランシスコ會、ドミニコ會並にアウガスチン會の教區からたきつけて熱心の度を越させてはいけないといふことであつた。吾人は後に、宣教師等の熱心は、與へられた特許で満足が出来ず、屢々教皇の命令に反した行動をなし、又その命令を避け、遂に其取消に遭ふに至つた事がわかるであらう。其結果は、殘念にも感情の行違を生じ、之が數多の教會の内部に

實におそろしい影響を及ぼした。併し、迫害の爲に各教團の宣教師等は、互に團結して愛し合ひ、又信仰の告白者達は、共に捕はれ、共に殉教するに當り、友愛と天主の平和の中に苦しみ且つ死んで行つたことが知られる。

(註一) 一六〇〇年の年報は紛失した。

Val. Carvaglio. Sopplimento dell'annua di 1600 (Oct. 1600 à fév. 1601.) Roma, 1603, in-8° Guerreiro. Relaçam de 1600 e 1601 (faits de 1600). Santa-Maria. Chronica de S. Joseph Recueil des Voyages qui ont servi à l'établ. de la C. des Indes Orientals, 1754, 12°, t. II. Purchas, his pilgrimage, or relations of the world, London. 1613, fol. (Pour Adams), et tous les collecteurs qui ont reproduit Purchas. Ballaire romain.

(註二) この三つの駐在所には、各々神父一人、神弟一人と、若干の問答師^{ウチメ}があつた。内海(Ouchime)には、會堂二つを癩病院が一つあつた。外海(Focame)には、ホロンダ(Forounda 福田^マ)が附屬して居り、聖アントニヨ(Saint Antoine)に奉獻した一つの會堂があつた。古賀(Conga)は、諫早(Isafay)を管理し、全部で五つの會堂があつた。

(註三) コーリ(Cori 大村附近、姉崎博士は郡に宛ててゐられるが、出所不明彼杵^{ソノキ}(Sonogh)及び鈴田(Souzouta)

(註四) 大村の領主ドン・サンセス(D. Sanche 大村喜前)の

夫人にして有馬の領主の妹であるドーナ・カタリナ(D. Catherine)が亡くなると、侍臣等は、喪の印に髪を切つた。日本の習慣によつて、多數の者が、同じく指を切らんことを希つた。然し、ドン・サンシユは、それを許さなかつた。

(註五) 有家^{アリエ}(Arye)シムガ(Chimaga 鳥原のこぢならん)加津佐(Canzouca)千々岩(Chinghia)及び西郷(Sago)

(註六) 天草(Amaousa)本渡(Fondo)及び神津浦(Conzoura)

(註七) 八代(Yachchiro)野津(Nozou)及び矢部(Yabe)と前年をいふ。

(註八) 毛利殿(Morindono)の首府廣島(Firochima)と山口(Amagoutchi)には、各々神父一人神弟一人が居つた。大層繁鬱な港たる下關(Chimonoseki)では、宣教師を得ることが出来なかつた。

(註九) Guerreiro, C. 19.

(註一〇) 熱心な信者により、白杵(Ousouki)と野津(Notsou)に夫々教會堂が建てられた。神父は、同じく府内(Founai)志賀(Chinga)及び野津(Nonzo)を訪れた。

(註一一) 筑前の博多(Facata)シムスチ(Chinsoutchi 新町か)及びシヤタクア(Chatacoua 姉崎博士は堅粕^マに宛てらる)肥前(Figen)の龍造寺(Riosogi)カンゲン(FOugentsou 藤津^マ)
(註一二) アウガスチンの父シヨアキム龍佐(Jachim Rioussa)も堺(Sacai)でやはり同じことをし長男のベノト(Benoit)は事業を繼續して來た。

(註一三) 一石は、一クルサード(Cruzade)若しくは、伊太利

の「ピアストル(Pastre)」に當る。

(註一四) 彼はエスパニヤ國マラガ(Malaga)教區アンテケラ(Antequera)に生れた。彼は一五五三年(○天文二十二年)アルカラ(Alcala)で耶蘇會に入り、一五七〇年(○元龜元年)テルセイル島(Terceire)のアンガラ(Angara)に派遣され、一五七九年更に日本に渡るため、印度ついでマカオに遣はされた。彼は、一五八二年(○天正十年)乗船して日本に向ひ、ひどい難船に遭つた。終に、間もなく、彼は日本傳道に入ることが出来た。—と神父マルチン・デ・ハラ(Le. P. Martin de Fara)は彼の葬式の演説をした(Franco. Imagem da virtude: Coimbra, t. II. pag. 523 et 627. Lisboa, 1717, 8°.)—附録第三を見られよ。一五七四年(○天正二年)ゴメス神父が耶蘇會の愛についてかゝれた感心すべき手紙あり。

(註一五) 彼女は、宣教師等に對し大なる尊敬の念を抱いて居つたので、自分の考を宣教師に打明けるところの出来ることを幸福として居つたことは、彼女は、たゞさういふ目的のためにポルトガル語の読み書きを學びその手だてをいつて一神弟がおくつてくれた、ア・ペ・セ讀本その外の本があつたに過ぎないので、嘗て神父にもあつた事はないのに、而も既に彼女はよく読み書きが出来、恐らくその出来はその先生以上であつたであらう。

(註一六) 兩軍のキリシタン宗門を奉ずる武士は、何れも兜に十字架、首には遺骨匣レリケイルや念珠ロザリヨをかけてゐた。—或日、一神父は騎兵の一隊に出くはした。すると、一紳士は、馬から下りる

日本吉利支丹宗門史(吉田)

と巾着の中から告白の書をとり出して、告白して又馬に乗つた。兵士達が京都をたつ際に、一神弟は告白をする間がないので、彼等に痛悔すべきことを願ひ、聖シヤブレ念珠を彼等に分けてやつた。彼は、出發に際し元氣に満ち、近く祕蹟の義務を果す機會のあることをのぞんで居つた。

(註一七) 彼は、享年五十四才、耶蘇會員たる事三十七年、日本の傳道に従ふこと二十年であつた。彼は、常に自らの敵にして貧者の味方であつた。

(註一八) 我々は、ゲレイル(Guerreiro, c. 21.)の中に、宣教師による、アダムス到着の物語を見出す。それは元來アダムスに對して餘り好意をもつたものではないが、内容の點からいふと、オランダ人やイギリス人の物語と少しも變りらい。

『この年、この王國の一港にオランダ人の乗つてゐる船が一艘ついた。オランダ人は、二年前に他の四隻の船と一緒にオランダを出發し、マゼラン海峽をのり越えてソンド群島(Barchipel de la Sonde)の方向に進んだ。この群島の中で、他のイギリスの船と出遭つたことは、吾々既にマラツカよりその便りを得た通りである。五隻のオランダ船は、嵐のために離れぐれになり、かくて唯一隻だけ豊後に到着したが、殆んど使用にたえなくなつて居つた。

生きのこつて船にあるもの僅かに二十五名で、いづれも長の間、耐えて來た激しい寒さと飢への爲に、或は病氣にかゝり、或ひは疲勞しきつて居つた。中にも二人は、到着後間もなく死んでしまつた。商品の中には、若干の羊毛、緋ラシヤ、

印度の織物、鏡、ギヤマン、珊瑚並にフランドルの珍奇の品々があつた。又多數の巨砲、更に夥しき小銃があつた。一宣教師は彼等に話しかけて、彼等の異端であるといふことを知つた。彼等は上陸するや、先づ自分等は日本と通商せんがために來たのであるといつた。併し、候は彼等の目的と之と違つて居つて、嵐があつたばかりにその帝國に吹きつけられたのであるといふことを了解した。何故かなれば、彼等のもつて來た商品は、揃つたものがなく、又他の船に積んでくるものとも違つてゐた。それから彼等の様子は、他の商人に比して立派でなく富裕らしいところなく、又さうした人のやうな皿(?)や從僕も居らず、夫から彼等が多數の大砲や小銃をもつてゐる所よりすれば、愈々、實際は兵隊として水兵として來たやうにしかされなかつた。さうしたところからすれ

ば、彼等があまり質のよい人々でない事がわかり、そこで、内府様は、奉行の忠告により直ちに家老オワイシエの一人を豊後に遣はして、船を京都もしくは堺に引かせることにした。彼は、日本の國是に従つてこの船を難破船として沒收し、乗組のオランダ人、十八門乃至二十門の大砲と共に、之を關東の港におくつた。同時に、彼は、主に小銃を非常に澤山の火薬よりなるその他の船貨をすべて沒收した』

(註一九) アダムスが妻とその友人におくつた二通の手紙は、バーチエース(Purchase)によつて保存されてゐた。日本語で書かれた彼の遺言書の寫しは、印度會社の文書館に確かに存してゐる。

(註二〇) 附録第二號ノ二

吉田小五郎